

## 文化財と技術 第9号

2019年2月28日 印刷

2019年3月1日 発行

編集	鈴木 勉
発行	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉
発行所	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉 東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)
印刷	千葉刑務所 千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)

## 『文化財と技術』

## 第9号

- 第一部 古代日本列島のものづくり
- ＜環頭大刀＞  
上梶 武 岡山県総社市こうもり塚古墳出土の単鳳環頭大刀  
金 宇 大 旋回式単龍環頭大刀の新例とその評価
- ＜三角縁神獸鏡＞  
鈴木 勉 三角縁神獸鏡の系譜論と製作地論から型式学を検証する  
鈴木 勉 岡村・光武氏らによる金石学的三角縁神獸鏡論について
- ＜鉄の加工技術＞  
黒木英憲 弥生時代の日本に特有で表面に長い溝（＝樋）のある  
戈（＝銚）すなわち「有樋鉄戈」の製法について  
瀧瀬芳之 日本列島内出土象嵌遺物集成（刀剣・銚・刀子編）  
鈴木 勉 線刻鉄刀と象嵌技術  
－移動型渡来系工人ネットワークの手掛かり－
- 第二部 古代朝鮮半島のものづくり
- 李鮮明・南宮丞 扶餘陵山里寺址出土鍍金細工遺物の製作技術研究  
鈴木 勉 たがねの切れ味から見える百濟王興寺金銅舍利銘の製作背景  
鈴木勉・金跳咏 新たに発見した三国時代の彫金技術と  
「はがねの熱処理技術」の関係
- 第三部 古文化財学
- 河野一隆 装飾古墳からみた平福装飾陶棺の画像学的検討  
塩屋公寛 考古資料のデジタル化と課題について  
鈴木 勉 流通古文化財の闇  
－金印・誕生時空論と福岡市博購入印章の調査－  
黒木英憲 提言：考古学研究者と金属に関わる  
多くの科学技術者の協力を目指して
- 第四部 復元研究
- 比佐 陽一郎 藤ノ木古墳出土耳環の復元製作について

## 岡村・光武氏らによる金石学的三角縁神獸鏡論について

鈴木 勉

1. 金石学の积文作業を軽視した岡村・光武氏説
2. 再検証・再积文の必要性
3. 陽鑄銘文の积文法
4. 鈴木による鏡銘の积文

## 1. 金石学の積文作業を軽視した岡村・光武氏説

2017年刊行の『鏡が語る古代史』<sup>1</sup>の「三角縁神獸鏡の工人はどこから来たか」の項で、岡村秀典氏は王仲殊氏と楊金平氏の渡来工人説を挙げて批判し、続いて「景初三年」鏡の銘文を読み解く」の項で、光武英樹氏による右の積文結果<sup>2</sup>を引用している。

光武氏による積文結果  
「景初三年、  
陳是作鏡、自有經述、  
本是京師、地地疋(そ)出、  
吏人詔之、位至三公、  
母人詔之、保子亘孫、  
壽如金石兮」

ここは金石学の基礎となる積文法について検討しよう。積文とは文章を読んだり解釈することではなく、その一字一字をいかなる文字に当てるかという金石学の基本作業のことを言う。古代の文字を現代の活字に変換するこの積文の作業無くしては金石文の研究は次に進めない。積文作業の重要性について、鈴木は繰り返しその重要性を説いてきた。参照されたい<sup>3</sup>。

岡村氏は積文作業を省略して「字積（読み方）」の問題に移る。

「問題は下句で、字形が鮮明でないため、左（下）表のように字積が分かれている。

表1 『鏡が語る古代史』における「景初三年」と「正始元年」銘積文の例示

	「景初三年」三角縁神獸鏡	「正始元年」三角縁神獸鏡
福山敏男	本是京師、杜□□出	本自荆（京）師、杜地命出
笠野 毅	本是京（鏡）師、杜地工出	本自州（彫）師、杜地所出
王 仲殊	本是京師、杜地亡出	本自州師、杜地命出
光武英樹	本是京師、地（他）地疋（所）出	本自荆（京）師、杜（他）地所出

「正始元年」銘の銘文と比べると、王説では両銘の意味が異なるのに対して、ほかの三説では同じ意味に解釈される。なかでも仮借字を用いて同一の字句を両鏡で書き分けた“同文異字”とする光武説はもっとも穏当な読み方である。＜中略＞蓋然性の高い解釈と言えよう。」

岡村・光武氏の研究に、金石文研究でも最も大切な積文作業が全く省みられていない点が二つあり、それが大きな問題を孕んでいることを次項と次々項で指摘したい。

## 2. 再検証・再積文の必要性

岡村氏が無批判に引用している光武氏論文に戻って「景初三年」三角縁神獸鏡の「本是京師、地（他）地疋（所）出」の積文を検討してみよう。光武氏説には福山氏、笠野氏、王氏らによって「杜地」と積文されたものをなんとか「他地」と読み替えたい意図がよく見える。なぜなら、光武氏は自ら「突飛」と評価するように、積文について述べる。

「しかし、この突飛とも言える異部仮借の例を経書などの古典類で探してみても見つかることはないだろう」

1 岡村秀典 2017 『鏡が語る古代史』岩波書店、220頁

2 光武英樹 2006 「所謂、卑弥呼の鏡とされる『陳是紀年鏡』銘文の積読（上）」「同（下）」『東アジアの古代文化』126,127

3 積文作業については、鈴木は繰り返しその重要性を説いてきた。鈴木勉・河内國平 2006 『復元七支刀—東アジアの鉄・象嵌・文字』雄山閣、162頁参照

文献史学の根本である「用例」を無視して「他地」の文字を当てようとしているのだ。この「突飛」な積文は学問的探求の方法を逸脱しているといえる。なんとしても「他地」と積文したいがために想像に想像を膨らませて光武氏は「他地」の積文案を作って見せた。岡村氏はそれを無批判に受け入れ、三角縁神獸鏡魏鏡説の証拠として挙げた。ここで問題なのは、「他地」の積文案を頭に浮かべた段階で経験のある金石学者であれば当然、先の積文作業（鏡銘の拓本や写真）に戻って再検証・再積文するところを実施していないのだ。光武氏本人も「突飛」と表現した積文案であれば、当然その積文案が妥当かどうか再検証・再積文しなければならない。金石学では再検証・再積文を繰り返して積文の精度を上げていく。アイデアで浮かんだ文字が本当に古代の工人が刻んだのかどうか、ということだ。こうした再検証・再積文の作業はいかなる学問でも怠ってはならない。

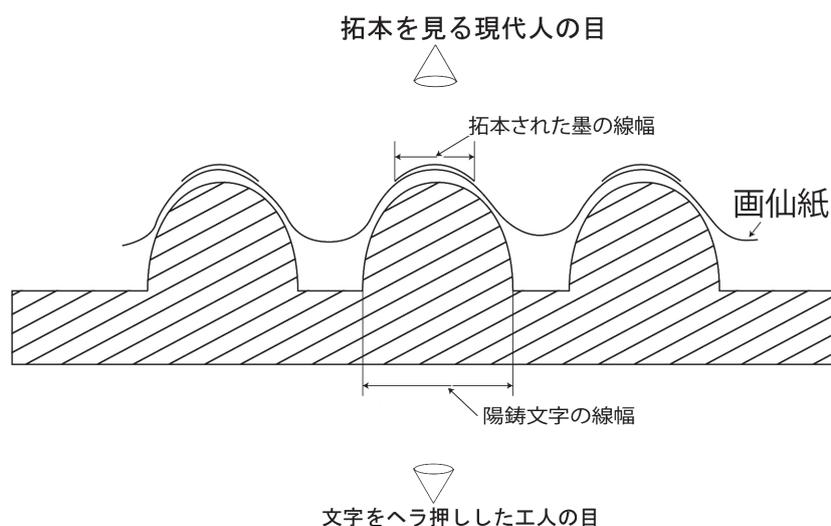


図1 陽鑄文字の工人の目と拓本を見る現代人の目の違い

### 3. 陽鑄銘文の積文法

光武氏論文は冒頭で、「銘帯の拓影に基づく字画トレースを」したと、積文作業を拓本によって行ったことを明らかにしている。しかし、鏡銘は特別に小さな陽鑄文字であるため、伝統的な拓本による積文の方法では文字の正確な復元は難しい。それは次の理由による<sup>4</sup>。拓本は陽鑄文字の線画の頂点に近いところ、つまり鑄型製作の段階のへら押しした溝の底の部分だけにタンポの墨がつく(図1)。ところが、鏡の鑄型を作った時、へら押し工人の目に映っている文字線の形は溝の表面部(出来上がった鏡の銘では線画の裾部になる)であるのだ。鑄型のへら押しされた文字は溝の表面部は太く、溝の底部は細くなる。言い換えれば、出来上がった鏡の銘では線画の裾部は太く、線画の頂部は細くなる。そのため、拓本に映った文字線は線画の頂部を映すこととなり、へら押しした工人の目に映っていた文字の線画とは異なる形を写し取っていることになる(図1)。

銘文の文字が極小である鏡銘の拓本では特にそれが顕著となる。積文作業はへら押しした工人の目に映っていた文字の線画を再現することが第一に行わなければならない。その復元が出来て初めて次の「下書きされた文字の復元作業」に入る。「工人の目に映っていた文字」の復元が、金石学では最も大切な基礎作業であることは言うまでもない。そのため、陽鑄文字の字画トレースは、拓

4 鈴木勉 2013『造像銘・墓誌・鐘銘 美しい文字を求めて—金石文学入門Ⅱ 技術篇—』雄山閣、p118～p123

本に依るのではなく、拡大写真を用いて線画の裾の部分の輪郭をトレースすることが望ましい。近年では三次元計測も使われるようになった。そうなれば、陽鑄文字の文字線の裾部をもっと容易にトレースすることができる。

#### 4. 鈴木による鏡銘の积文

そこで私は、改めて神原神社古墳出土景初三年銘三角縁神獸鏡の积文作業を行った。拡大写真を使い、文字線の裾部をトレースしていった。

図2を見れば、光武氏説すなわち岡村氏説の「杜」を「他」と読むことも、「工」を「疋」と読むことも到底出来ないことが分かるであろう。私は島根県教委刊『出雲古代文化展』の拡大写真を使った。その結果は、「本是京師、杜口工出」である。光武氏と岡村氏は、アイデアが出たところでもう一度実物に戻ってその积文案を再検証・再积文しなければならなかった。岡村氏案はアイデアと検証を繰り返す积文作業を行わずして自説に近づけた积読であり、光武氏案は、基本中の基本たる积文における検証作業を怠った論考だと言える。基礎資料を扱う学問である金石学では決して見過ごしてはならない。

また、付け加えれば、図2で見れば、王仲殊氏の「工」を「亡」とする积文にも無理があるといえる。

岡村氏が述べようとしたことは、考古学が最も得意とする型式学では三角縁神獸鏡の製作地に辿り着けないことを自覚し、ふたたび三角縁神獸鏡研究の基礎としての評価を得ている富岡謙蔵氏等の金石学へ戻って製作地論に踏み込もうとしたのであろう。ところが、岡村氏は金石学の最も大事な点である积文作業を全く省略して、光武氏の「本是京師、他（他）地疋（所）出」の积文案を取り上げた。それを無批判に「もっとも穏当な読み方である」「もっとも蓋然性の高い解釈といえよう」と評価してしまった。最も大切な基礎資料となる金石文の积文作業には、慎重な吟味が必要であった。

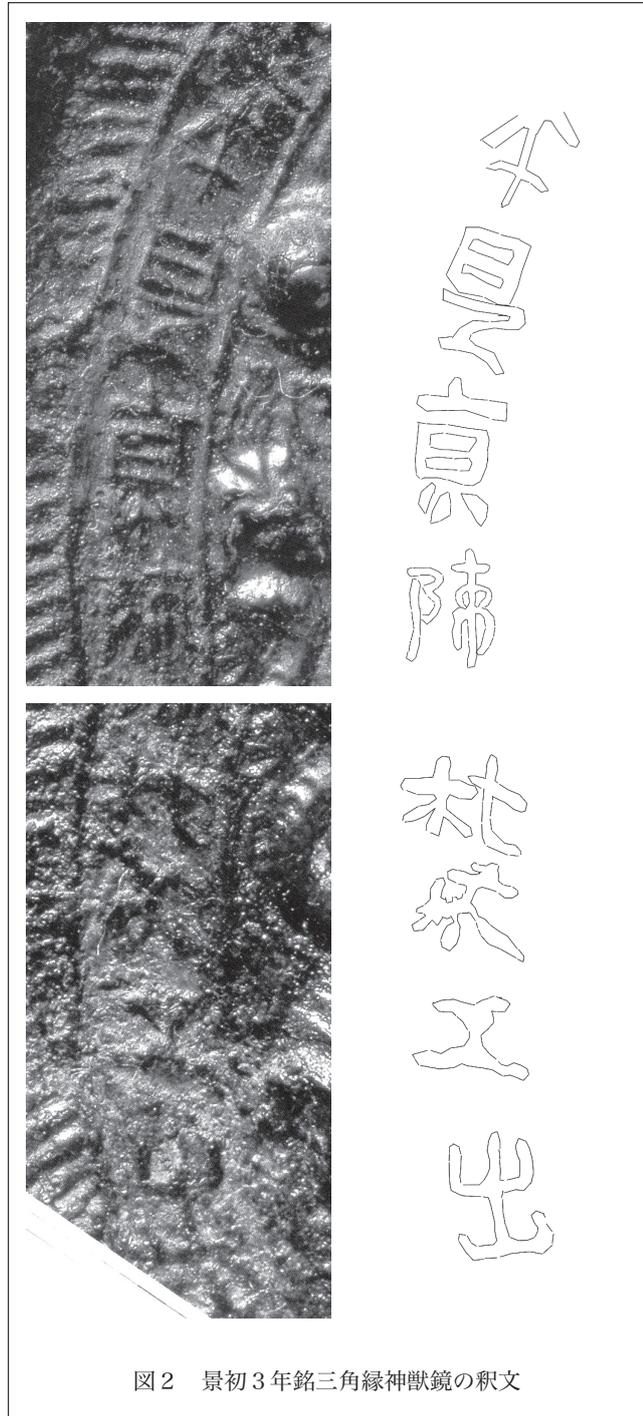


図2 景初3年銘三角縁神獸鏡の积文